

# 『門徒総代として』

— 歩もう住職とともに —

## 「念仏者の生き方」

仏教は今から約二五〇〇年前、釈尊がさとりを開いて仏陀とされたことに始まりま  
す。わが国では、仏教はもともと仏法と呼ばれていました。ここでいう法とは、この世  
界と私たち人間のありのままの真実ということであり、これは時間と場所を超えた普遍  
的な真実です。そして、この真実を見抜き、目覚めた人を仏陀といい、私たちに苦悩を  
超えて生きていく道を教えてくれるのが仏教です。

仏教では、この世界と私たちのありのままの姿を「諸行無常」と「縁起」という言葉  
で表します。「諸行無常」とは、この世界のすべての物事は一瞬もとどまることなく移り  
変わっているということであり、「縁起」とは、その一瞬ごとにすべての物事は、原因や  
条件が互いに関わりあつて存在しているという真実です。したがって、そのような世界  
のあり方の中には、固定した変化しない私というものは存在しません。

しかし、私たちはこのありのままの真実に気づかず、自分というものを固定した実体  
と考え、欲望の赴くままに自分にとって損か得か、好きか嫌いかなど、常に自己中心の  
心で物事を捉えています。その結果、自分の思い通りにならないことで悩み苦しんだり、

争いを起こしたりして、苦悩の人生から一步たりとも自由になれないのです。このよう  
に真実に背いた自己中心性を仏教では無明煩惱といい、この煩惱が私たちを迷いの世界  
に繋ぎ止める原因となるのです。なかでも代表的な煩惱は、むさぼり・いかり・おろか  
さの三つで、これを三毒の煩惱といいます。

親鸞聖人も煩惱を克服し、さとりを得るために比叡山で二十年にわたりご修行に励ま  
れました。しかし、どれほど修行に励もうとも、自らの力では断ち切れない煩惱の深さ  
を自覚され、ついに比叡山を下り、法然聖人のお導きによって阿弥陀如来の救いのはた  
らきに出遇われました。阿弥陀如来とは、悩み苦しむすべてのものをそのまま救い、さ  
とりの世界へ導こうと願われ、その願い通りにはたらき続けてくださっている仏さまで  
す。この願いを、本願といいます。我執、我欲の世界に迷い込み、そこから抜け出せな  
い私を、そのままの姿で救うとはたらき続けていくくださる阿弥陀如来のご本願ほど、有  
り難いお慈悲はありません。しかし、今ここでの救いの中にも、そのお慈悲  
ひとすじにお任せできない、よろこべない私の愚かさ、煩惱の深さに悲嘆せざるをえま  
せん。

私たちは阿弥陀如来のご本願を聞かせていただくことで、自分本位にしか生きられな  
い無明の存在であることに気づかされ、できる限り身を慎み、言葉を慎んで、少しずつ

でも煩惱を克服する生き方へとつくり変えられていくのです。それは例えば、自分自身のあり方としては、欲を少なくして足ることを知る「少欲知足」であり、他者に対しては、穏やかな顔と優しい言葉で接する「和顔愛語」という生き方です。たとえ、それらが仏さまの真似事といわれようとも、ありのままの真実に教え導かれて、そのように志して生きる人間に育てられるのです。このことを親鸞聖人は門弟に宛てたお手紙で、「(あなた方は)今、すべての人びとを救おうという阿弥陀如来のご本願のお心をお聞きし、愚かなる無明の酔いも次第にさめ、むさぼり・いかり・おろかさという三つの毒も少しずつ好まぬようになり、阿弥陀仏の薬をつねに好む身となっておられるのです」とお示しにいられています。たいへん重いご教示です。

今日、世界にはテロや武力紛争、経済格差、地球温暖化、核物質の拡散、差別を含む人権の抑圧など、世界規模での人類の生存に関わる困難な問題が山積していますが、これらの原因の根本は、ありのままの真実に背いて生きる私たちの無明煩惱にあります。もちろん、私たちはこの命を終える瞬間まで、我欲に執われた煩惱具足の愚かな存在であり、仏さまのような執われのない完全に清らかな行いではできません。しかし、それでも仏法を依りどころとして生きていくことで、私たちは他者の喜びを自らの喜びとし、他者の苦しみを自らの苦しみとするなど、少しでも仏さまのお心になう生き方を目指

し、精一杯努力させていただく人間になるのです。

国の内外、あらゆる人びとに阿弥陀如来の智慧と慈悲を正しく、わかりやすく伝え、そのお心になうよう私たち一人ひとりが行動することにより、自他ともに心豊かに生きていくことのできる社会の実現に努めたいと思います。世界の幸せのため、実践運動の推進を通し、ともに確かな歩みを進めてまいりましょう。

二〇一六(平成二十八)年十月一日

浄土真宗本願寺派門主 大谷光淳

## 伝灯奉告法要御満座の消息

昨年十月一日よりお勤めしてまいりました伝灯奉告法要は、本日ご満座をお迎えいたしました。十期八十日間にわたるご法要を厳粛盛大にお勤めすることができましたことは、仏祖のお導きと親鸞聖人のご遺徳、また代々法灯を伝えてこられた歴代宗主のご教化によることは申すまでもなく、日本全国のみならず、全世界に広がる有縁の方々の報恩謝徳のご懇念のたまものと、まことに有り難く思います。

昨年の熊本地震から一年を経過し、甚大な被害をもたらした東日本大震災から六年が過ぎました。改めてお亡くなりになられた方々に哀悼の意を表しますとともに、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。どれほど時間が経過しても心の傷は癒されることなく、深い痛みを感じてお過ごしの方も多くおられるでしょう。なかでも、原子力発電所の事故による放射性物質の拡散によって、今なお故郷に帰ることができず、不自由な生活を余儀なくされている方々が多くおられます。思うままに電力を消費する便利で豊かな生活を追求するあまり、一部の方々に過酷な現実を強いるという現代社会の矛盾の一つが、露わになったということができます。

自分さえ良ければ他はどうなってもよいという私たちの心にひそむ自己中心性は、時として表に現れてきます。このような凡愚の身の私たちではありませんが、ご本願に出遇い、阿弥陀如来のお慈悲に摂め取られて決して捨てられることのない身ともなっています。そして、その大きな力に包まれているという安心感は、日々の生活を支え、社会のための活動を可能にする原動力となるでしょう。

凡夫の身であることを忘れた傲慢な思いが誤っているのは当然ですが、凡夫だから何もできないという無気力な姿勢も、親鸞聖人のみ教えとは異なるものです。即如前門主の『親鸞聖人七百五十回大遠忌法要御満座を機縁として「新たな始まり」を期する消息』には、

凡夫の身でなすことは不十分不完全であると自覚しつつ、それでも「世のなか安穏なれ、仏法ひろまれ」と、精一杯努力させていただきました。

と記されています。このように教示された生き方が念仏者にふさわしい歩みであり、親鸞聖人のお心になつたものであるといただきたく思います。このことは、ご法要初日に「念仏者の生き方」として詳しく述べさせていただきました。

今、宗門が十年間にわたる「宗門総合振興計画」の取り組みを進めておりますなか、来

る二〇二二(平成三十五)年には宗祖ご誕生八百五十年、そして、その翌年には立教開宗八百年という記念すべき年をお迎えいたします。

改めて申すまでもなく、その慶讃のご法要に向けたこれからの生活においても、私たち一人ひとりが真信心をいただき、お慈悲の有り難さ尊さを人々に正しくわかりやすくお伝えすることが基本です。そして同時に、仏さまのような執われのない完全に清らかな行いはできなくても、それぞれの場で念仏者の生き方を目指し、精一杯努めさせていただくことが大切です。

み教えに生かされ、み教えをひろめ、さらに自他ともに心安らぐ社会を実現するため、これからも共々に精進させていただきましよう。

平成二十九年

五月三十一日

二〇一七年

龍谷門主 釈 専 如

# 浄土真宗の教章（私の歩む道）

宗名 浄土真宗

宗祖 親鸞聖人

（三開山）

ご誕生 一一七三年五月二十一日（承安三年四月一日）  
ご往生 一二六三年一月十六日（弘長二年十一月二十八日）

宗派 浄土真宗本願寺派

本山 龍谷山本願寺（西本願寺）

本尊 阿弥陀如来（南無阿弥陀仏）

聖典

・釈迦如来が説かれた「浄土三部経」

『仏説無量寿経』 『仏説観無量寿経』 『仏説阿弥陀経』

・宗祖 親鸞聖人が著述された主な聖教

『正信念仏偈』（『教行信証』行巻末の偈文）

『浄土和讃』 『高僧和讃』 『正像末和讃』

・中興の祖 蓮如上人のお手紙

『御文章』

教義 阿弥陀如来の本願力によって信心をめぐまれ、念仏を申す人生を歩み、この世の縁が尽きるとき浄土に生まれて仏となり、迷いの世に還って人々を教化する。

生活 親鸞聖人の教えにみちびかれて、阿弥陀如来のみ心を聞き、念仏を称えつつ、つねにわが身をふりかえり、慚愧と歡喜のうちに、現世祈禱などにたよることなく、御恩報謝の生活を送る。

宗門 この宗門は、親鸞聖人の教えを仰ぎ、念仏を申す人々の集う同朋教団であり、人々に阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝える教団である。それによって、自他ともに心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献する。

浄土真宗の生活信条

一、み仏の誓いを信じ 尊いみ名をとなえつつ  
強く明るく生き抜きます

一、み仏の光りをあおぎ 常にわが身をかえりみて  
感謝のうちに励みます

一、み仏の教えにしたがい 正しい道を聞きわけて  
まことのみりをひろめます

一、み仏の恵みを喜び 互にうやまい助けあい  
社会のために尽します



## 刊行にあたって

二〇一四（平成二十六）年六月、第二十四代即如ご門主さまの本願寺住職及び浄土真宗本願寺派門主のご退任に伴い、第二十五代専如ご門主さまに法統が継承され、二〇一六（平成二十八）年十月より、十期八十日間にわたり「伝灯奉告法要」が勤修されました。

私たちは、念仏者としての自覚のもと、このご勝縁を機縁として、真実のみ教えを次代へ伝え、多くの人々に広める営みをさらに進めていかねばなりません。しかし現代においては、私たちを取り巻く環境は刻一刻と変化し、人々の価値観も多様化し、社会全体が複雑化する中で、人々の悩みは深刻化し、社会の課題も増大しています。

ご門主さまは「法統継承に際しての消息」の中で、「本願念仏のご法義は、時代や社会が変化しても変わることはありませんが、ご法義の伝え方は、その変化につれて変わっていくかねばならないでしょう。現代という時代において、どのようにしてご法義を伝えていくのか、宗門の英知を結集する必要があります。」とお示しになりました。さらに伝灯奉告法要に際してのご親教「念仏者の生き方」において、「国の内外、あらゆる人びとに阿弥陀如来の智慧と慈悲を正しく、わかりやすく伝え、そのお心になうよう私たち一人ひとり

が行動することにより、自他ともに心豊かに生きていくことのできる社会の実現に努めた」と思います。〃と決意を述べられ、「伝灯奉告法要御満座の消息」においても、〃み教えに生かされ、み教えをひろめ、さらに自他ともに心安らぐ社会を実現するため、これからも共々に精進させていただきましよう。〃と示されました。

私たちは、ご門主さまのご消息、ご親教でのお示しのお心を体し、僧侶・寺族・門信徒がそれぞれの立場で、お念仏の声が世の中へ広がっていくよう努めていくことが大切です。このたび、さらなる門徒総代会の活動の活性化をはかり、門徒総代一人ひとりがその自覚を深め、行動力をたかめてゆくための一助として『門徒総代として―歩もう住職ととみに―』を作成いたしました。

本書を通し、門徒総代の皆さまが「門徒総代の立場や役割」「寺院の役割や意義」そして「門徒総代に期待されていること」を改めて確認いただくことを願っております。

最後に、門徒総代の皆さまには、今後とも、ご住職と力を合わせて、み教えを広め、そして寺門興隆のため、より一層ご尽力賜りますようお願い申し上げます。

全国門徒総代会

門信徒教化部

## 一、「お寺」とは

### はじめに

「お寺って何のためにあるのでしょうか？」

という問いを、今までお寺とご縁のない人々に問いかけてみると、どんな答えが返ってくるでしょう。

たとえば、

「仏さまの話を聞かせていただくところ」

「ご先祖の供養くようをしていただくところ」

「幸せになるようお願いにいくところ」

「精神修養せいしんしゅうようをするところ」

という答えになるかもしれません。

このように、「お寺」に対する印象、イメージは様々ですが、それは、仏教各宗派の長

い活動の歴史の中で培つちかわれてきたものといえるでしょう。

仏教各宗派のお寺の成立の経緯けいゐは様々ですが、浄土真宗以外のお寺には、出家者しゅっけしやとしての僧侶がおられます。たとえば、その出家者に帰依された時の権力者けんりよくしやや豪族の人々が、出家者に修行しゆぎやうしていただいて、その功德をいただいたり、一族の繁栄はんえいのために先祖供養を依頼したり、自分たちに降りかかる災いわざわを遠ざける祈禱きとうをしていただくために、建てられたということがあります。

ですからこのような形で成立したお寺は、本来、出家者のためのものであり、時の権力者や豪族のためのお寺であったといえます。

それに対して浄土真宗の「お寺」の起源を尋ねてみると、浄土真宗のみ教えを聴聞ちやうもんする念仏者すべての人々のための聞法もんぽうの道場からはじまったと言ってもいいのではないかと思います。

少し詳しく見ていくと、浄土真宗のお寺は、まず、熱心な念仏者ねんぶつしやが、浄土真宗のみ教えを聴聞する場として、生活している自宅を提供した「念仏者の集いの場」に始まるのです。そこではご本尊ほんぞんが安置されご法義ほうぎが讃嘆さんたんされました。そして、この念仏者の輪が広

がっていき、独立した道場を建てていきました。

その後、その大切な道場の維持管理と運営のため、その道場に常駐する専任者が必要となり、聞法の集まりの先頭に立っていた念仏者とその役に選任されました。その専任者がのちに僧侶となり、施設も道場からお寺の形に整えられていきました。浄土真宗では、このような成り立ちのお寺が多く見受けられます。

浄土真宗のお寺とは、「南無阿弥陀仏」のお念仏の教えを聞かせていただく聞法の道場なのです。この私が、お浄土で必ず仏とならせていただくことの幸せを喜び、互いが阿弥陀如来に願われた者同士として認め合い、仏さまの前で遠慮なく話ができる場所なのです。このことは、浄土真宗のお寺の本堂の形態からもうかがうことができます。他宗のお寺の本堂は、出家者が修行や祈禱を行う場所であるため、内陣が広く取られておりますが、浄土真宗のお寺の本堂は、法要儀式を行う内陣より、僧侶も門信徒ともに、仏さまのお徳を讃え、み教えを聴聞する外陣の方が、広く取られているのです。

### 「宗門法規」の規定から

それでは、ここで私たちの所属している浄土真宗のお寺の役割について、宗門（浄土真宗本願寺派）の最高法規である「宗制」「宗法」を通して、うかがってみましょう。

私たちの宗門は、国や地方公共団体、また一般社会の様々な組織がそうであるように、規則に基づいて運営されています。

まず、私たちの宗門の成立に関する極めて重要かつ原則的な事項を定めた規則、「宗制」には、その前文【資料48～49頁】で、次のように宗門の「基本理念」が述べられています。

※最高法規：「宗法」第九十四条 この宗門の最高法規は、宗制及び宗法とする。いかなる規則及び行為も、これらの規定に違反してはならない。【資料58頁】

本宗門の宗祖親鸞聖人は、『顕浄土真実教行証文類』を著し、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空の七高僧の釈義を承け、『仏説無量寿経』の本義を開顕して、本願名号の真実の教えを明らかにされた。これが浄土真宗の立教開宗である。